韓日古詩歌に現われた自然觀の比較研究

—時調と萬葉の自然素材を中心にして—

李 漢 昌*

目　次

Ⅰ. 序　論
Ⅱ. 時調・萬葉の自然素材の比較
1) 動物素材の比較
2) 植物素材の比較
Ⅲ. 時調・萬葉の自然素材の性格比較
1) 時調の自然素材の性格
2) 萬葉の自然素材の性格
Ⅳ. 時調・萬葉に現われた自然觀
1) 時調に現われた自然觀
2) 萬葉集に現われた自然觀
Ⅴ. 結　論
o 國文抄錄

Ⅰ. 序　論

この論文は韓日古詩歌の自然觀を比較する研究の一次的な試論である。時調と萬葉集の和歌を對象として、まず兩國の歌の上に現われた自然素材の種類とその頻度數を比較し、その素材の性格とその性格の變化を調べ、それらを基にして兩國の傳統的な自然觀を考察することを目的にしたものである。

比較研究という場合、兩國の全般的な歌を對象にして通史的に檢討すべきである。ところが、韓國で時調以前の資料はほとんど消滅して、現在まで殘っている鄕歌と高麗俗謠は研究對象にならないほどその量が少ない。また一擧に兩國の歌を通史的に照鑑するということは、研究歷が日淺な筆者には手にあまることでまず身近な時調と萬葉集の和歌とを研究の主な對象にしたのである。

したがって今度の研究對象の兩國の歌の間には時代的なずれがある。言いかえれば比較的近世に成立した時調と上古時代の萬葉の和歌の間には時代的なずれがあり、そのため歌の上に影響を及ぼ

* 이 論文은 1985年度 文敎部學術研究振興基金의 支援을 받아 완성되었음.

* 前人文大 助敎授

した諸般要因にも差が生じるのである。即ち、時代的な背景、當時の人たちの意識水準、漢文學と、宗教、思想、文化においての外來要素[1]などがそれである。
こうした諸般要因の差のある作品群を對象にしたこの試論的な研究は比較研究の觀點から見るとその意味が半減するかも知らない。

しかしこの研究の意義は、語彙、音韻、文法、表記法など語學的影響關係を主な對象にした從來の韓日詩歌の研究領域を文藝的な面に導入擴大しようとすることにある。即ち兩國の文學に現われた自然觀はもちろん、兩國民の情緒及び國民性、兩國の歷史的、文化的、社會的環境まで究明す後續研究を活潑に行なう契機にはなれると思う。またこの小論文はこれらの問題を究明する作業を續けていきたいと思っている筆者の研究活動の一つの根據にしようとするものである。

終りにこの論文の研究對象と統計調査方法について述べると、

1)研究對象になった歌は時調文學事典(鄭炳昱編著、新丘文化社、1966年)に載っている時調2376首と萬葉集事典(伊藤博外2人編、有精堂、昭50年)の索引に載っている和歌4516首をその對象にした

2)動植物素材の分類は動物は鳥類、獸類、昆虫類、魚介類の四つの項目に分類して、さらに魚介類は魚、貝、其他と小分類した。植物は樹木、花類、草類、果類、穀類、海藻の六つに分類した。

この分類の基準は一般的な慣例によるもので、特別な理由がない恣意的な分類である。また時調の場合、桃梨とか草木という漢字語はそれぞれ桃と梨、草と木のように二つに分類して統計處理した。そして萬葉の場合、題詞の素材も統計に入れたので、一般の統計とは差が生じるが大きな差ではないと思う。

3)本論文で引用した時調の日譯は「韓國の古時調」(苦松實編著、高麗書林、東京、1979)に據ったという點も明らかにしておく。

1) これらの諸般要因を整理すれば次のようである。

	時調	萬葉
時期	14.5 C～19 C末	5·6 C～8 C 中半
文字與否	初期は漢文を使用したが後にはハングル使用	漢字傳來された普及期として萬葉仮名使用
意識水準	原始信仰・習俗から脫皮	原始信仰・習俗が支配
外來文化	定着され影響力が強い	流入期として比較的影響か少ない
享有層	儒學者, 士大夫, 妓生(藝者)後は庶民階級登場	天皇族から農民までの各階層後期には專門歌人の專有物

Ⅱ. 時調・萬葉の自然素材の比較

1) 動物素材の比較

動物素材を調べて見ると、まず時調の方が萬葉より素材の種類も多様であるし、頻度數も多く現われている。

(表1)

	時調		萬葉	
	種類	頻度數	種類	頻度數
鳥類	44(84)	475(903)	33	697
獸類	27(51)	317(602)	22	290
昆虫類	25(48)	135(256)	10	42
魚介類	24(46)	124(236)	18	103
計	120(228)	1051(1997)	83	1132

上の表1)によると、時調では120種の動物素材が1051回に、萬葉では83種の動物素材が1132回現われて、動物の種類は時調の方が多様で、頻度數は萬葉の方が少なめに多く現われているように見える。しかし比較對象とした全體の歌首を考慮して算出した括弧の中の數値[2]を見ると、素材の種類數と頻度數はそれぞれ228種と1997回にも及んでいて、動物素材においては時調の方が萬葉より多様に現われているのである。

實際に鳥、獸、昆虫、魚介類などを調べて見てもやはり魚介類の貝類を例外にした全ての項目においても時調の方が萬葉より多様に現われているのがわかる(表5參照)。

先ず鳥は動物素材の中で一番多く詠まれた素材として時調、萬葉の兩側に第一位を占めていて、昔から鳥についての關心が高かったことがわかる。[3] より具體的に調べて見ると時調には44種の鳥が475回現われているのに反して、萬葉では33種の鳥が697回も現われていて、鳥における種類は

2) この論文の調査對象になった萬葉の和歌(4516首)は時調(2376首)の1.90倍にあたる。以下この論文で全體の歌首を考慮した數値というのは、時調の統計値に1.9倍して算出した數値として括弧に括って時調の統計値と並記した。

3) 安英姬、「古典文學に現われた鳥の意味」『亞細亞女性研究』(淑明女大、亞細亞女性問題研究所) 1973, p.148。
鳥は時調のみならず韓國の古典に巫俗的機能をもっている神の象徵であり、靈物であり、人の變身として多く現われている。萬葉に現われた鳥の意味についてはⅢ章で後述する。

時調の方に頻度數は萬葉の方に多く現われているように見える。しかし全體の歌數を考慮した數値は84種の903回に及んでいて、頻度數にも時調の方が萬葉より多く現われているのが見られる。

(表2)

	時	調	萬	葉
1	雁	76	ほととぎす	176
2	白鷺	63	雁	72
3	ほととぎす	42	鶴	50
4	烏	38	うぐひす	48
5	鶏	32	鴨	32
6	うぐひす	32	千鳥	30
7	鶴	30	う	14
8	雁	24	鷹	12
9	鷺	22	鶏	10
10	鳳	19	きぎし(きじ)	10
11	燕	12		
12	鴛鴦	11		
計	12種 (23種	401回 762回)	10種	454回

また、表2)によると10回以上現われているのは時調の場合12種の401回であり、萬葉の方は10種の454回でふたつの間に大きな差は見られない。ところで全體の歌首を考慮した數値は23種762回にもなるわけで萬葉との差はより著しくなるのである。

それらの中で雁、ほととぎす、鶏、うぐひす、鶴、鷹などの6種は兩方に現われているが、白鷺、白鷺、烏、鳳、燕などは時調に、鴨、千鳥、うなどは萬葉に多く現われている。

汎稱の素材は時調の42回に反して萬葉では159回にも及んでいるが、萬葉の場合、たいていずとり、まとり、みづとりというように多樣な修飾語に冠せられた素材が多いのである。[4)]

それらの內容について調べて見ると、時調では白鷺、鷺、鶴などが道德的價値をもっている存在として現われているが、萬葉では白鳥、鴨などの初期の呪術的性格の素材とほととぎす、うぐひす、たづなど後期の景物的性格の素材が多く現われているのが特徵である。

また時調では鳳(19)、大鵬(5)、鸞鳥(2)、精偉鳥(1)など多くの想像の動物が登場するのに萬葉では全く現われていないことも注目に値いする。

次にけものもやはり時調の方が萬葉より多樣さを見せてくれる。上の表1)で、時調には27種の

4)萬葉にはずとり、ほとり、みずとり、さかとり、しらとりなど多樣な修飾語に冠せられた汎稱以外にも、たづ(あしたづ)、たか(あおたか)千鳥(川千鳥)など多樣な變種の名稱が現われ、鳥について萬葉人の鋭い觀察力がわかる。

けものが317回も現われ、22種の290回に現われた萬葉とは大きな差は見られない。ところが全體の歌首を考慮した數値によると、51種602回になるわけでけものにおいても時調の方の多様さを示してくれる。

(表3)

	時	調	萬	葉
1	馬	85	馬	125
2	犬	49	し か	95
3	牛	38	かはづ	22
4	龍	22		
5	かはづ	21		
6	ろ ば	16		
7	虎	15		
8	し か	12		
計	8種 (15種)	258回 (490)	3種	242回

表3)によると、10回以上現われた素材は萬葉では馬(125)、しか(95)かはづ(22)の三種の242回でこの三種が全體頻度數290回の80%を占めていて極めて偏重されているのがわかる。反面時調の方は馬、犬、牛、龍、かはづ、ろば、虎、しかなどの8種258回で全體の歌首を考慮した數値も15種490回にまで及んでいる。

兩方とも馬、しか、かはづは共通して現われているし、犬、ロバ、虎、龍などは時調の方に多く現われているが、萬葉が時調より多く現われているものは一種もない。それらの内容を調べて見ると、時調の犬、ロバなどは實用的素材であり、かはづも、かえる、ひきがえる、かまぐちなどと共に實用的または教訓的に用いられたのに反して、萬葉では景物的素材に用いられている。萬葉で虎が現われていないのは日本では棲息していなかったせいであり、前章の鳳凰、大鵬と同様に想像の動物の龍が出てこないのにも目をひかれる。

三番目にあげられることは鳥、獸に比べて、昆虫についての關心は時調、萬葉の兩方ともに低いことである。上の表1)によると、萬葉では10種42回にとどまっているのに反して、時調では25種の135回も現われて萬葉よりはるかに多く現われているのである。特に全體の歌首を考慮した數値によると48種257回に及んで、その差はより著しくなっているのである。

(表4)

	時	調	萬	葉
1	蝶	39	蟬	14
2	蜘 蛛	15	こほろぎ	10
3	とんぼ	11		
計	3種 (6種	65回 124回)	2種	24回

表4)で10回以上の素材を調べて見ると時調には蝶、蜘蛛、とんぼの三種の65回で全體の歌首を考慮した數値は6種の124回にも及んでいる。

一方、萬葉では蟬、こほろぎの二種24回に現われているだけであり、それ以外の素材はたいてい5回以内に散在しているだけである。

ところが時調の方は11回しか現われていない素材が12種にものぼる。これらの自然素材は朝鮮後期に登場した辭說時調[5]の上にはえ(蠅)蚊などの庶民生活の反映された素材が集中的に現われた結果であり、決して時調においての昆虫素材の多様さを見せているとは言えないのである。

終りに魚介物について調べて見ると時調には24種の海物が124回現われ、18種の103回の萬葉とは大きな差がないが、全體の歌首を考慮した數値によると46種の236回になるわけで時調の方が種類數においても頻度數においても多く用いられたと言えるのである。これは日本は島國であり、萬葉人はいつも海に對して關心をもって詩歌を詠んで來たという事實から考えると極めて意外なことのように思われる。

ところが10回以上のものを調べて見ると、萬葉ではあゆ、いさな貝の三種(47回)が現われているのに時調では73回の汎稱の魚以外には一種もないのである。それにこの魚介物を魚、貝、其他の三つに分類して見ると表5)で見られるように兩方とも偏りが見られる中でも時調の方がより偏っているし、また汎稱が多く現われている。

(表5)

	時調		萬葉	
	種類	頻度數	種類	頻度數
魚	11(21)	99(188)	9	37
貝			4	47
其他	13(25)	25(48)	5	19
計	24種 (46種	124回 236回)	18種	103回

詳述すれば、まず魚の場合9種の魚が37回現われた萬葉より11種の魚が99回も現われた時調の方が多く現われたように見える。

ところが時調の場合は73回の魚をのぞいては10余種の素材が後代の辭說時調などに1～2回に集中的に散在しているだけであり、この數値をもって、魚介物について時調歌人の關心が萬葉人の方より高かったとは言えないのである。この事實は萬葉にはしじみ(1)、しただみ(1)、みな(5)、あはび(8)などを入れて4種47回も出ている貝が時調では全く現われていないということからも

5)辭說時調は・時調とともに英・正祖朝の以後に庶民の間で發達して來た變態的なものである。平時語は初中終章の三章に分けられ、各章はさらに4～5字の四句に構成されたのに、辭說時調は初中章はもちろん終章も4～5字の基本句より長くすることが出來る長型時調である。

わかるのである。

2) 植物の素材比較

前章の動物素材とは異なり、植物素材においては萬葉の歌が時調の方よりその種類も多様であり頻度數も多く現われている。

(表6)

	時調		萬葉	
	種類	頻度數	種類	頻度數
樹木類	26(49)	468(889)	78	939
草類	22(42)	148(350)	62	772
穀類	9(17)	41(78)	8	22
海藻類	1(2)	2(4)	4	150
不明類			26	65
小計	58(110)	695(1,321)	178	1,948
※ 花類	23(44)	443(842)	90	1,085
※ 果實類	8(15)	39(74)	24	382
大計	89(169)種	1,177(2,236)回	292種	3,415回

卽ち表6)[6]によると時調には58種695回にわたって植物素材が現われたのに反して、萬葉では178種の植物が1948回も現われているのである。そのことは全體の歌首を考慮した數値によっても時調は110種の1321回にとどまっていて、やはり萬葉の方に植物素材が多く用いられたことを立證してくれる。

このように1200余年前に完成された萬葉に170余種の植物が登場しているということは驚くべきことで、萬葉人がどのように自然について鋭い觀察力と纖細な文學的感受性をもっていたかを傍證してくれるのである。[7]

具體的に表6)を調べて見ても萬葉の植物素材は時調に比べて樹木類、草類、花類はもちろん穀類を除いた果實類、海藻類に至るすべての項目において、はるかに多様な素材が數多く現われているのがわかる。

まず樹木類について述べると、時調・萬葉にそれぞれ1·2位を占めて來た兩方ともに多く詠まれた關心の高い素材である。ところが具體的に調べて見ると、萬葉には78種の樹木が939回も現われているのに反して、時調には26種の樹木が468回にとどまっている。全體の歌首を考慮した數

6) 梨、梅などの素材はそれぞれ(樹木、花類)と(樹木、花類、果實類)などのように二度統計處理したので、表6)で花類と果實類は全體から分離した。だから花類と果實類を除いて合算した小計が表10)の植物素材統計と一致するのである。

7) E·C Seidensticker「The Japanese and Nature」·(日本學報 第4輯, 韓國日本學會), 1976。

値である。49種の889回は、萬葉の方が時調より頻度數も多く、特に素材の種類においてははるかに多様さを見せてくれる。

(表7)

	時	調	萬			葉		
1	松	98	1	萩	145	11	山 吹	19
2	柳	74	2	梅	143	12	はり	15
3	竹	55	3	松	84	13	竹	14
4	桃	53	4	橘	83	14	たまかづら	12
5	梨	39	5	藤	46	15	すき	11
6	梅 花	37	6	櫻	44	15	たく	11
7	梧 桐	17	7	柳	40	15	つばき	11
8	杏	13	8	あづさ	35			
9			9	卯の花	24			
10			10	くず	20			
計	8種 (17種	386回 733回)				計	17種	757回

10回以上現われた素材は表7)でわかるように萬葉の場合17種757回であり、時調は8種の386として全體の歌首を考慮した數値は17種733回になるわけで両方の間には差が見られない。ししかし時調の場合は10回以上の種類がわずか8種であり、特にこれらも桃、梨など花類を除いたら松、柳、竹、梧桐の4種だけで、きわめて偏重されているのを物語ってくれる。

それらの植物の中で萬葉・時調ともに多く現われているのは松、柳、梅、竹の4種だけあり、時調が萬葉より多く現われているのは梧桐、桃、梨、杏などの4種であるが、萬葉では時調より多く現われているのは萩、たちばな、藤、櫻、あづさ、うの花、くず、山吹、はり、たまかづら、すき、たく、つばきなどの13種である。特に目につくのは萬葉で一番好んで詠まれた萩、藤、櫻などは、時調では見られないし、時調で愛好された桃、梨、杏などは萬葉にはほとんど現われていない素材だという點である。

次に花類について調べて見ると、花は樹木とともに多く詠まれて來た素材として萬葉では90種の花が1085回も現われたのに、時調では23種の花が443回現われている。全體の歌數を考慮した數値も44種の842回にとどまっていて時調より萬葉の方に多様な素材が多く詠まれたことを示してくれる。

とくに表8)で10回以上現われた素材は萬葉の場合21種845回現われたのに對して時調では6種の花が205で、全體の歌を考慮した數値も11種の390回になっていて萬葉には時調よりはるかに多様な種類の花が多く現われている。その上に時調ではただ花という汎稱が192回にも及んで全體の花の頻度數の43.3%を占め、これにまた10回以上現われた6種の素材を入れると全體の頻度數の89.6%を占めていて極めて偏重されているのが見られる。

（表8）

時		調	萬						葉			
1	桃	55	1	萩	145	8	くれなゐ	35	15	むらさき	17
2	梨	39	2	梅	143	9	なでしこ	29	16	はり	15
3	梅	37	3	橘	83	10	ち	27	17	をみなへし	15
4	蓮花	35	4	ぬばたま	81	11	うの花	24	18	たまかづら	12
5	菊	26	5	藤	46	12	こも	22	19	ゆり	11
6	杏	13	6	櫻	44	13	くず	20	19	たく	11
			7	尾花	36	14	山吹	19	21	つばき	10
計	6 種 205 回 (11種 390 回)								計	21 種	845 回

兩側の素材を比較すると中國傳來の植物として中國漢詩の影響が認められる梅の一種だけが兩方に見われている。時調の方に多く現われているのは桃、梨、はちす、菊、杏などの五種であり、それらのすべては中國の漢詩文の素材から借用した觀念的な素材である。[8] 反面萬葉に多く現われているのは萩、橘などの 20 種であったがそれらのほとんどは後期萬葉に多く現われる美的景物の素材である。

三番目の草類は植物素材の中でも萬葉に比べて時調の方が貧弱で制限されている素材である。表6)によると萬葉には 62 種の草類が 772 回も現われているのに、時調は 22 種の 184 回しか現われていないし、全體の歌首を考慮した數値も 42 種の 350 回にとどまっているだけである。

（表9）

時		調	萬						葉			
1	はちす	35	1	ぬばたま	81	7	ち	27	12	あかね	13
2	菊	26	2	すが	65	8	あさ	23	14	あやめくさ	12
3	わらび	11	3	あし	59	9	こも	22	15	あゆ	11
			4	すずき	36	10	むらさき	17	15	しば	11
			5	くれなゐ	35	11	をみなへし	14	15	な	11
			6	なでしこ	29	12	こけ	13	15	ゆり	11
計	3種 72 回 (6 種 137)								計	18 種	490 回

8) 鄭炳昱,「古時調に現われた花」『韓國古典 詩歌論』新丘文化社, 1977, p.360。
鄭炳昱氏によると漢籍（古文眞寶）の漢詩の中に出てくる花類は、桃(16)、梨(11)、梅(6)、菊(5)、蓮花(3)、海棠花(2)がそれぞれ 1～6 位を占めていて表 8) の時調の花類の結果ともほぼ一致している。

表9)で10回以上現われた素材を見ると、萬葉の場合18種490回も現われたのに反して、時調では3種の草が72回、全體の歌首を考慮した數値によってもわずか6種の137回になるわけである。特に10回以上の草類の中でもはちす、菊など花類を除いた純粹な草類は、伯夷叔齊の故事から由來したわらび一種があるだけで、時調の歌人がどんなに草類に對して關心が低かったかを物語ってくれるのである。草類において關心が低かったのは、草類は樹木や花類に比べて大きさとか形態などが目につきにくかったからであり、汎稱の素材が多く現われたのもそこに理由があるのである。具體的に調べて見ると、時調・萬葉の兩方に多く現われている素材はないが、時調では中國漢詩の影響でわらび、菊、はちす、蘭などが現われているし、萬葉ではあさ、すがなどの呪術的・實用的素材と、ち、すすき、くれなゐなどの生活周邊の景物素材が多く愛好されたのである。

4番目に穀物類について調べて見ると、萬葉には8種の穀類が22回、時調には9種の穀類が41回であり 全體歌首を考慮した數値も17種の78回しか現われていないのである。時調の方が萬葉より數値上は高い値を見せてくれるが、具體的に調べて見ると兩方とも10回以上素材は一種もないし、五回以上のものも時調は稻(米を入れて)、麥、豆、粟の4種であり萬葉も稻(9)、粟(5)しか出ていない。この事實は時調・萬葉ともにその種類も限定されているし、頻度數も少ない關心の低かった素材であったことがわかる。

韓日兩國はともに農耕民族として稻作文化を營んで來たのに、穀物類においてこのように兩方とも貧弱さを見せるのは意外なことのように思われる。しかしその理由として時調の場合穀物類が登場するのは後期庶民階級の辭說時調の登場以後のことであり、一般的に道德忠君など人事に沒頭して觀念的素材を好んだ當時の士大夫、儒學者たちの關心を穀物類は引くことが出來なかったことが上げられる。また萬葉の場合も、初期萬葉には農耕的性格の穀物素材が現われたが、後期に現われたのは稻ぐらいで、穀物類は景物意識の素材を好んだ後期の歌人には適切ではなかったと思われる。

五番目の果實類も穀物類とともに關心が低かった素材である。8種の39回だけ現われている時調の場合は全體の數値を見ても、15種の74回にとどまっているのに反して、萬葉の方は24種382回も現われていて、一見して時調より多樣であることがわかる。ところが萬葉の場合は橘、ぬばたま、梅の三種の素材が204回も集中したせいであり、全體的な面から言えばやはり素材が偏重制限されているのは時調とほぼ同じである。具體的に調べて見ると時調には桃(4)、うり(4)、なつめ(3)などが實用的素材として後期の辭說時調に現われているだけであり、萬葉には梅、たちばななどが後期の景物素材に用いられた以外には東歌とか山上憶良の歌などに實用的素材として5回以內に散在しているだけである。

終りに海藻類は、時調の方には2回現われたわかめしかないのに反して、萬葉には4種の海藻が150回も現われている。時調にこんなに海藻類が現われていないのは昔から韓國人は海洋に對して關心が低かったということを物語ってくれるのである。ところが海洋民族の日本にも、も(67)め(4)たまも(5)などの汎稱が多く現われているのに、具體的素材はあしつき(1)、すかも(1)、みる(6)など3種8回しか出ていないのは、今とは異なって當時は海に對する關心特に海藻類を分別するほどの關心がなかったからだと思われる。

以上時調と萬葉の上に現われた自然素材に對して動物と植物に大別して述べて來たが、これらの結果を整理すれば次のとおりである。

(表10)

	時調		萬葉	
	種類	頻度數	種類	頻度數
植物	58(110)	695(1,321)	178	1,948
動物	120(228)	1,051(1,997)	83	1,132
計	178(338)種	1,746(3,318)回	261種	3,080回

まず表10)は時調と萬葉との歌に現われた自然素材の種類數と頻度數を整理したものである。これらによると、萬葉に261種の自然素材が3080回現われているのに反して、時調には178種の1746回全體の歌數を考慮した數値によると338種の3317回も現われていて、兩者の間に大きな差は見つからないと言えるだろう。このように自然と密接な關係を結んで自然を主對象として歌われた萬葉の歌と自然素材が制限された人事を中心にして詠まれた時調との間に大きな差が見つけられないのは意外な事實のように思われる。

しかし歌の性格の比較は單なる素材の種類數とか頻度數だけではなく、分布と素材の性格をともに調べるべきであり兩方の歌に現われた自然素材を動・植物別に大別したのが表11)である。

(表11)

	時調		萬葉	
	種類	頻度數	種類	頻度數
植物	58(32.58%)	695(39.81%)	178(68.20%)	1,948(63.25%)
動物	120(67.42%)	1,051(60.19%)	83(31.80%)	1,132(36.75%)
計	178種	1,746回	261種	3,080回

表11)では、時調は動物素材が種類には67.42%頻度數では60.19%を占めて、動物に向く性格であるのに對して、萬葉は植物素材が種類には68.20%頻度數には63.25%を占めていて植物に向く傾向を見いだすことが出來る。これは興味深い事實で、兩國の建國神話・說話はもちろん諺などの日常言語生活でも韓國は一般的に動物素材が圧倒的に多く現われているのに反して、日本側は比較的に植物素材の向きになっている點と一致して兩國民の動・植物素材の嗜好と共に民族的性格まで示唆してくれる意味深いことだと思われる。[9]

9) こういう性格は兩國の建國神話において韓國では動物素材(虎と熊)が出ているのに、日本では植物素材(草)が出てくることからもわかるのである。
また、韓國の諺には動物向き性向(動物素材23.53%, 植物素材4.11%)が現われている(民俗學大觀卷6. p.679)が、日本の色彩名には動物素材(11%)より植物素材(35%)から多く由來した(日本を知る事典、社會思想社)ことからもわかるのである。

次に自然を一般的な素材として詠んだ汎稱の比率を調べて見ると、15.72％の萬葉より21.76％の時調の方に汎稱の素材が多く現われている。

(表12)

		時調		萬葉	
		種類	頻度數	種類	頻度數
動物素材	鳥類	475	42(8.8％)	697	159(22.8％)
	獸類	317	21(6.7％)	290	22(7.6％)
	昆虫類	135	9(6.7％)	42	1(2.4％)
	魚介類	124	79(63.7％)	103	35(33.98％)
	動物類計	1,051	151(14.37％)	1,132	217(19.17％)
植物素材	樹木類	468	40(8.5％)	939	21(2.2％)
	草類	184	70(38.04％)	772	169(21.89％)
	穀類	41	16(39.02％)	22	·
	海藻類	2	·	150	73(48.67％)
	小計	695	126(18.3％)	1,883	263(13.97％)
	※花類	443	192(43.34％)	1,085	※
	※果實類	39	16(41.02％)	382	※
	植物類計	1,177	334(28.38％)	1,467	
動・植物類大計		2,228	485(21.76％)	3,015	474(15.72％)

表12)に[10]よると汎稱の比率は植物素材では時調(28.38％)が萬葉(13.97％)より、動物素材では萬葉(19.17％)が時調(14.37％)より多く現われている。

關心度の低い素材に集中的に現われるこの汎稱的素材は時調では動物素材の魚介類と樹木類を除いたすべての植物素材に、萬葉では動物素材の鳥類、魚介類と植物素材の草類と海藻類に多く現われている。

このような汎稱的素材は時調だけではなく韓國文學一般に多く現われているもので、[11]それは自然を觀察の對象とするより總體的な自然として理解しようとする韓國人の性格、即ち融合調和を重視する性格に由來する點が多いのである。

それら自然素材の結果を全體的に調べて見ると、まず動物の場合、鳥は素材の種類と頻度數においても一番多樣に繁く現われた關心の高い素材でありその次が獸である。その反面昆虫と魚介類は

10) 萬葉の場合、花といっても汎稱の意味より櫻を指す場合が多いのでその區別があいまいになる。この性格のため表12)の汎稱の統計では※の花類は果實類は調査對象から除外した。

11) 鄭在鎬,「韓國歌辭文學論」集文堂 1982, p265-283。
氏の調査によると時調と同時代の詩歌文學である歌辭文學に現われた汎稱の比率は植物27.2％、動物26.5％という時調より高い數値になっている。

兩方とも素材の種類も頻度數も貧弱であり、一部の制限された素材以外は5回以内に散在している關心の低い素材である。植物の場合素材別の關心度は時調の場合は樹木、花類、草類、果實類、穀類の順であり、萬葉の場合は花類、樹木、草類、果實類、穀類、海藻類の順である。

即ち樹木と花類は兩方に1・2位を占めている關心の高い素材であり、その次が草類である。果實類、穀類、海藻類は關心が低い素材でこれもやはりたいていの素材が5回以内に散在しているのである。また萬葉に比べて時調の方は草類と海藻類についての關心がとても低いという事實が目につくのである。

これらの自然素材をより具體的に調べて見ると、まず兩方とも共通的に多く用いられた素材は

植物素材一梅、あさ、つつじ、つばき、稻、たで、松、柳、竹、くず

動物素材一雁、ほととぎす、鷄、うぐひす、鶴、馬、牛であり、

時調の方に比較的に多く現われている素材としては

植物素材一うり、梨、桃、わらび、桐、はちす、菊であり

動物素材一白鷗、白鷺、からす、鳳、虎、犬、蝶、龍などがあり、

萬葉の方に比較的多く現われている素材としては

植物素材一卯の花、あしび、くれなゐ、櫻、あかね、萩、はり、藤、なのりそ、め

動物素材一鴨、千鳥、う、うづら、鹿、蛙、くわこ、貝などがある。

ところが兩方ともに現われた自然素材の違う點について調べて見ると、次のことが注目をひく。まず兩方の自然素材は地域的環境的要因が反映されている。その具體的な例として時調で多く現われている虎、菊などが萬葉には全く出てこないのはそれらの素材が日本には傳來していなかったせいである。また藻とか貝などの魚介類、海藻類などが時調にはほとんど現われていないのも前述したように島國の日本と比べて、昔から海への關心が低かったことを物語ってくれるのである。

次には時調の素材には梨、桃、わらび、桐、菊、鳳、龍など中國の文獻から借用したものが多くなるのに反して、萬葉の場合はうの花、萩、櫻、はり、なのりそなど比較的日常生活の周邊から取った素材が多く現われている。それらの內容について調べて見ると、實用的性格以外にも時調では人事的性格の反映された觀念的素材が、萬葉の場合は呪術的性格と自然の景物的性格の素材が多く現われている。

Ⅲ. 時調・萬葉の自然素材の性格比較

1) 時調の自然素材の性格

時調の上に現われた自然素材について詳述して見るとまず自然素材も倫理的、道徳的價値をもっている。

1)「牡丹は花の中の王であり、向日葵は忠臣孝子のようだ。梅花は隱逸の士、杏花は小人のようで、一中略一この中で、梨花は詩客であり、紅桃、碧桃、三色桃は雅男とでも言うべきだ。」

上の歌がその性格をよく示しており、梅花は隱逸の士で梨花は詩客のように歌われている。このように時調の場合自然素材が人格化された存在として扱われている例は數えきれないほど多く現われている。

卽ち、死六臣として名高い成三問の忠義歌では松が、節義歌ではわらびがそれぞれ忠節の象徵として歌われている。

また黃菊玉堂歌では菊が志操のある君子として尊敬されたが、桃梨は輕佻浮薄な花として賤視されたことからもその性格がうかがえる。

一般的に時調では竹、梅、菊などの歲寒三友[12]を初め、耐寒植物が愛好されたのに反して、尹善道の五友歌でわかるように、草類はすぐ枯れてしまう性格のため否定的な存在として扱われ、和歌とは對照的に草類はあまり詠まれなかった。[13]

こういう人格化は植物素材だけではなく動物素材にも好んで用いられた。鶴は長壽を、雁は兄弟友愛を、白鷺は淸廉潔白の象徵として用いられたが、烏のように反哺報恩の鳥と同時に名利に目をうばわれた群れとして肯定的イメージと否定的イメージをもっているものもある。

この人格化は萬葉以前の記紀歌謠などに現われた寓意性とも、萬葉後期に現われるイメージの觀念化、類型化現象とも異なる性格である。[14]

次に時調の自然素材には、不老長生、理想鄕、神仙思想などの道教的色彩の歌が多く現われている。

12) 日本人も歲寒三友として松、竹、梅の三つの植物を正月のかざり、結婚式の島台、衣裳などおめでたい意を表すものとして用いたが、時調で見られるように人格化された例は見つけられない。

13) 草類は萬葉に比べて貧弱な素材で、10回以上現われたのはわずか3種であり、花類を除いたら、わらび一種しか現われていないのである。

14) 八田若郞女の御歌(記66)などで見られるように記紀歌謠には擬人化された自然素材が現われているし、後期萬葉の自然素材にも觀念化された好惡感情が現われている。しかしそこには時調の松のイメージで見られる松：生→靑→直→節→德という善惡是非の價値判斷が見られない。

2)「大鵬を掴みにして稲妻で焼いて食べ、崑崙山を小脇にかかえ、北海をひとまたぎすると、泰山が爪先に蹴られて、ガタンガタンと音を立てる。」

3)「智異山の兩端水を、かねて聞いてはいたが今見れば、桃花の浮かんだ清流に、山の影さえ沈んでいる。童よ、武陵桃源はどこなのか、わたしにはまさしくここかと思われる。」

上の歌で大鵬と武陵というのは、それぞれ中國傳說の中に出てくる想像上の大鳥であり神仙たちが住んだという理想鄕の世界である。特に武陵は桃花源記から由來したもので、理想鄕の象徵としてよく登場する。時調でよく出る不老草と不死藥も神仙の長生術から由來した素材で、そこには不老、不死長生を願う人間心理がうかがえる。

また大鵬のように實際存在していない想像の動物、卽ち龍とか鳳などの素材が萬葉にはほとんど現われていないのに時調に多く現われているのは中國神仙思想の影響を大きくうけたと[15]いうことを物語っているのである。

また時調の上には歸去來的な性格の自然素材が多く現われている。

4)「山の頂に靜かに雲が起こり、水の上には白鷗が飛んでいる。俗世間に關心もなく、親しくするものはこの二つだけ。一生涯憂いを忘れ去り、おまえをまねて遊ぶとしよう。」

5)「童よ、蓑、笠の支度をせよ、東の谷間の川に雨が降った。長たらしい鉤の無い釣り針を結えつけたのだから、魚たちよ、驚くには及ばず無い、ただわたしが興に堪えかねて遊んでいるだけだ。」

上の4)の歌で白鷗は世俗から超脫した鳥で、官界から隱退した歌人自身を象徵している。この白鷗は江湖生活を詠んだ歌には必ずともいえるほど多く出ている鳥である。5)の歌で魚も中國の姜太公の故事から由來した素材で、世の中の富貴とか公明などには無關心な歌人自身の心境がよく現われているのである。

それ以外にも松と竹は士大夫の嗜好にかなった素材であり、竹林七賢とか山菜などは脫俗と風流という生活を背景にしたいわゆる江湖詩歌にはよく現われているものである。草類においてわらびだけが多く現われているのもその理由からであり、こうした自然素材の出現もやはり陶淵明の歸去來文學[16]から由來したもので、そこには老莊の無爲思想という道家の影響が見うけられる。

15)一般的に、萬葉集は大和魂の源として外來思想の影響が見つけられない純粹なものだといわれているが、實際にはわずかながら、浦島子傳說(萬1740)、つみの木の歌(萬385-387)とか若返りの若水の歌(萬627-628)で、神仙思想の影響を捉えることが出來る。

16)朴晟義、『韓國文學背景研究下』二友出版社、1980. pp.572-578。
陶淵明は韓國の江湖歌首に一番影響を及ぼした人で、趙峨億氏の論文によると陶淵明と關わりある古時調は2500首の中で83首に、歌辭は調査對象の137首の中で30首に及んでいる。

このように時調には人事的性格の自然素材とともに中國故事から由來した道教的色彩の强い尙古的で復古的な傾向を帶びている自然素材が多く現われている。

ところが韓國の詩歌の上には文學理論と思想宗教などの面において中國の漢詩が大きな影響を及ぼしたというのは周知のことであるが、時調においても中國の文獻から借用した素材が多く現われている。[17] こうしたことは、四君子とか歲寒三友はもちろん時調の中に多く現われた桃、梨、はちす、菊、杏花など花類のすべてが中國の文獻(古文眞寶)と一致している事實からもわかることである。

しあし中國文化の影響の產物である觀念的自然素材は後期になって庶民の辭說時調の登場とともに急に減少して、そのかわりに生活周邊の實用的自然素材が多く登場することになる。このように庶民の生活相を歌った生活周邊の素材、實用的素材が多く現われたのは 17 C中半以後のことである。その背景について述べると 17 C初の壬辰倭亂(文祿の役)と丁酉胡亂の兩亂以後、儒教の價値觀が權威を失い、朝鮮朝の兩班社會の秩序は崩壞してしまったのである。そのかわりに庶民階級の登場とともに時調にも庶民生活相を歌った辭說時調、蔘時調が現われ、のみ、しらみ、いぬなど生活周邊の實用的素材が多く現われたのである。[18]

しかし辭說時調は 17 C中半以後庶民の一部の階級で現われた傾向で、それは以前から長い歷史をもって傳えられた士大夫たちの觀念的性格の時調に比べると極めて制限的な傾向であり、決して時調の主流とはならなかったのである。[19]

2) 萬葉の自然素材の性格

時調には中國から借用した觀念的性格の自然素材が多く現われているのに反して萬葉には日常生活の周邊から採集したものが多く現われる。もちろん梅とか橘のように中國から傳來したものもあるが、萩を初め葦、菅、芒、茅、藻など時調ではほとんど關心を見せなかった生活周邊の植物を萬葉人は好んで詠んだのである。

前述したように 1200 ~ 1300 年前の歌集に 170 余種という植物が多く現われているのは萬葉歌人がいかに自然について豊かな感受性と觀察力をもっていたかを物語ってくれるのである。實際、

17) 李命吉, 『時調に現われた李朝時代の事大主義と事大思想』(慶尙大論文集 11 集 1972) pp. 139-160。
氏の調査によると時調事典の古時調 2376 首の中で、中國から借用した素材は半數に近い 1049 首に現われているといって、その根底には事大主義の意識が根を下しているといっている。

18) 鄭在鎬, 前揭書 p. 278。
時調と歌辭の自然素材も士大夫中心のものと庶民作品のには顯著な差がある。卽ち前者には鳥類と龍鳳などの想象の動物が、後者には、のみ、しらみなど庶民生活が反映された素材が多く現われている。

19) 秦東赫, 『古時調文學論』 螢雪出版社, 1982. p.24。
全體古時調の中で辭說時調は 13 %を占めていてその比重は平時調の 80 %に比べてきわめて低いのである。

萬葉人の動・植物の自然觀察にはおどろくほどのするどい面があるのである。植物觀察の例を上げると花の咲く時期(萬818)花の變色(萬773)はもちろん、植物の睡眠運動(萬1461)とか 再生現象(萬3491)、植物のバイラス病(萬4268)、粘液分泌(萬3501)など極くこまかい面まで及んでいる。[20]

ところが後代の歌集にも見られないほど多様な萬葉の植物素材を櫻井滿氏は大きく、1)松、橘、などのような祭りとか常世の花、2)稻、櫻のような呪農性格の花、3)萩とか梅などの風流の花と三つに分類したことがあるが、[21] 萬葉の自然素材は初期の自然素材に多く現われた呪術的性格ないし呪農的性格と後期に多く現われた景物的性格と大別することが出來ると思う。

それらについて詳述するとまず呪術的宗教的性格の素材は初期萬葉に多く現われるもので古代人のアニミズムの產物である。

6)「たまかづら實ならぬ樹にはちばやぶる神そ着くというならぬ樹ごとに(萬101)」

7)「茂岡に神さび立ちと榮えたる千代松の木の年の知らなく(萬990)」

上の歌でわかるように實の實らない木には神が降臨しているし、松は神がやどっている榊として呪術的性格をもっているのである。即ち、松、竹などは時調では節槪とか忠節の象徵として人格化されたのに反して、萬葉では神の依代として呪術的性格を帶びている。このように初期萬葉集では常綠樹だけではなく花とか草木などすべての自然が活靈をもっている神であり、神靈の依代であり、神物の供物として歌われたのである。

その性格は萬葉の歌にもよく登場する祭などでかざしにする黃葉、梅、萩、なでしこ、樓、柳、藤、山吹などとか蔓にする菖蒲、靑柳、橘などにもその痕跡が殘っていて萬葉人の自然についての呪術的宗教觀を見いだすことが出來る。

こういう呪術的自然素材は植物素材だけではなく、動物素材にも現われたのである。

8)「ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隱りなむ(萬416)」

上の歌で鴨は生命の運搬者として信じられて來たもので、呪術的性格が反映されている。また古事記の天降說話や倭建命などの說話で出てくる雉や八尋白知鳥などとか、靈界から來て死後の靈魂の世界を司るほととぎすなどを見ても(方丈記)、自然に對する日本人の意識の中には古代のアニ

20)小清水卓二,「萬葉の草、木、花」朝日新聞社, 昭45, pp.111-175。
この本の"Ⅱ章萬葉びとの自然觀察"にはすぐれた萬葉人の自然觀察について詳述されている。

21)櫻井滿,「花の民俗學」雄山閣, 昭60, pp. 133-147。

ミズムの思想がいかに根深く下しているかがわかる。[22]

つぎに、呪農的色彩の自然素材について述べると長い間、日本人に愛好されて來た櫻も民俗生活の上には大切な呪農の花であった。即ちサクラのサは穀靈を、クラは神座の意を表わす古語で、サクラは春の初めに咲く穀靈の依代としてその花の咲き具合によって秋の實りの凶豊を占う呪農の花であったのである。[23]

9)「橘の守り部の里の門田早稻刈る時過ぎぬ來じとすらしも(萬2251)」

10)「處女らが行きあひの早稻を刈る時になりにけらしも、萩が花咲く(萬2117)」

こうした呪農的性格は上の歌でわかるようこ、農耕作物である稻に現われているのはもちろん後の歌でもわかるように景物の代表的な素材として後期萬葉に多く現われている萩でさえ、農耕的感覺を捉えることが出來るのである。[24]

この呪農的性格は動物素材にも現われている。即ち、後期萬葉の代表的景物素材として萬葉人によって好んで詠はれたほととぎすさえ

11)「ほととぎす來鳴きとよまば草とらむ花橘を宿には植ゑずて(萬4172)」

12)「ほととぎす鳴く聲聞くや卯の花の咲き散る岡に葛引く處女(萬1942)」

上の歌では農耕に深い關わりのある鳥として詠まれたのである。

以上調べたように、早い時期から現われている花とか鳥などの自然素材にはその美的性質より宗教的、實用的性格の色彩がつきまとっているのが多いのである。そうしたことは比較的に呪術的、農耕的性格が強いこも、ひえ、なのりそ、いね、むらさきなどの植物素材と鶴、鴨、ぬえとり、烏などの動物素材が、民謠的色彩の濃い卷11、卷12、卷13、卷14の歌集と東歌などに多く集中していることからもわかることである。[25]

しかし初期に多く現われた、これらの自然素材は後代になるにつれて消えて行く、そのかわりに季節美感を伴う景物的素材が現われることになるのである。

---

22) 大岡信,「四季の歌、戀の歌」筑摩書房, 昭60 p.62.
氏は古代日本人が鳥の聲に注意を引かれたのは鑑賞の對象ではなく、むしろ鳥が魂を誘い出すものとして恐れられていたからだといっている。

23) 櫻井滿, 前掲書, p.144

24) 櫻井滿, 前掲書, p.11から再引用。
折口信夫氏によると稻作民族において花はまず稻穗の先ぶれ—御穀(ミトシ)の兆であり、櫻の花も雪とともに、稻の花の象徵とみられたといっている。

25) 大久保正,「萬葉集の諸相」 pp. 126-133

實際にそれらの變化について調べて見ると麻、梓、杉、菅、竹、たで、なのりそ、はりなどのように花を主とせず、美的感覺より實用的、宗教的意味を多く有した素材は初期の萬葉に多數を占めていたが、天平期を境にして、後期萬葉には梅、萩を初めとして卯の花、櫻、すすき、たちばな、なでしこ、柳、をみなへしなど季節の美的感覺を伴う素材が多く現われることになっている。卽ち梅を初めなでしこ、藤、女郎花、百合などは天平以前には一例も見えなかったものであり、菖蒲、卯の花、山吹、萩、橘などは少數しか見えなかったものであるが、天平期に入ってから急にその數が增えて來たものである。

この變化は自然についての萬葉人の關心が宗教的、呪農的性格から脫皮、實用性を中心とした生活の場から關賞の對象と推移したことを意味することで、こうした意識は早くも萬葉集初期からその芽ばえが見られるといわれる。[26] ところがこうした意識が自然素材に反映され、變化をもたらしたのはやはり中國から渡來文化が流入、景物意識が抬頭した天平期以後のことでその變化を要約すれば次のようである。

まず萩とか大陸から傳來した梅などに關心を見せると共に素材を美的感覺で選擇することになったのである。これは萬葉初期の歌人が生活周邊から自然を詠んだこととは對照的に美的嗜好にかなう一部の素材だけを詠むことになったということを物語ってくれるのである。詳述すれば、梅は記紀などにはその名が出てこないもので、藤原時期に傳來して、天平期になってから急激に多く歌われた渡來植物である。

13)「梅の花夢に語らく雅びたる花と吾思ふ酒に浮べこそ(萬 852)」

上の歌でもわかるように、櫻はみやびの花で舶來文化に憧がれていた天平貴族の間には卷 5 の「梅花の歌 32 首」のような梅花の宴が盛んに行われたのである。また萩も萬葉初期には例が現われていないのに景物意識の擡頭とともに萬葉植物の一位を占めることになったのである。

14)「人皆は萩を秋といふよし吾は尾花が末を秋とは云はむ(萬 2110)」

15)「秋萩の枝もとををに置く露の消なば消ぬとも色に出でめやも(萬 1595)」

萩は上の 14)の歌でもわかれるように秋を代表するものとして萬葉集で一番愛用されたものである。それは日本文學の獨自的な美の典型的な素材として萬葉時代にはすでにその根を下して 15)の歌で見られる(萩と露) のように(萩と鹿) (萩と雁)(萩の古枝)(色づく萩の下葉)などの美の pattern が形成されたのである。

次にはこのように美的感覺にかなった素材を選定することによって素材の幅がだんだんせまくなって行く一方、自然素材がもっているイメージも景物の方向へという變化が生じたのである。

26) この景物意識は春山萬花の艶と秋山の彩とを競わせた額田王の春秋競憐歌(萬16)で捉えることが出來る。

李相業氏の調査によると[27] 萬葉には植物素材が175種1478回にも及んでいるのに反して、古今集には38種の223回、後撰集には31種203回で、古今・後撰を合わせて見ても38種426回しか現われていない。即ち古今集と後撰集の總歌首はそれぞれ1100首と1426首で萬葉集の4516首の1/2を越えているのに植物素材において總首は2/9に、頻度數は2/7にとどまっていてこの事實をよく說明してくれる。

16)「向つ峯に立てる桃の木 成らめやと人そささやく汝が心ゆめ(萬1356)」

17)「春の苑紅にほふ桃の花 下照る道に出で立つ少女(萬4139)」

また同じ素材もその性格が天平期を境にして變質をもたらした例を上げると上の16)の歌では戀の成就を桃の結實にかけた歌で桃は呪術的な性格をもっているが、17)の歌は美しい美人圖を見る思いがするような名高い大伴家持の桃の歌で木の下まで照り輝いている桃の花の美しさがよく現われている。

前の11)の歌と12)の歌などでもわかるように初期には農耕に關わる鳥として呪農的性格の鳥であったほととぎすが、萬葉後期になると

18)「藤波の紫りは過ぎぬ あしひきの山ほととぎすなどか來鳴かむ(萬4210)」

のように花を思慕して山から下りる全く異なるイメージの鳥として變わったのである。

終りに景物意識の結果、春と秋など季節の變化とその折々の風物によって自然素材は因襲的に類型化されて現われたのである。即ち、山上憶良の秋の七草もその典型化因襲化された例であるが、春には梅、櫻、青柳、夏には橘、うの花、秋には萩、黃葉、冬には椿などというふうにたいていの對象が定まって來るし、動物素材にも春には鶯、夏はほととぎす、秋は雁としかなどのように固定化、典型化されて現われる。[28]

またこのような自然素材の固定化、典型化の現象が進むにつれて自然素材が一定なきまりによって慣習的に組合わされるいわゆる取り合わせが登場することになる。例を上げるとほととぎすには橘、萩、鹿、卯の花、うぐひすには梅、柳、竹、卯の花というふうに取り合わされて現われる。その外にも萩と鹿、鶴と葦というふうに、數多くの取り合わせが現われるが、これもイメージの類型化から生じた現象ともいえるだろう。

このように自然素材が固定化、類型化されて行く傾向は、日本人の美意識または日本人の自然觀の本質を見せてくれるもので、美的自然體驗の定型化の傾向とともに日本人の自然に對する鑑賞と享有の不徹底さを見せてくれるものである。

27)李相業, 梁碩元,「日本文學と自然觀照」(慶尙大論文集, 1977) p.145.

28)小清水卓二, 前揭書, p.131.

Ⅳ. 時調・萬葉に現われた自然觀

1) 時調に現われた自然觀

時調の上に現われた自然觀を、自然素材を通じて調べて見るとまず萬葉の歌に見られるような呪術的自然觀のかわりに自然についての親近感が現われている。 韓國の歌にも時調以前の新羅の鄕歌などには呪力をもっている自然現象を歌ったものがずいぶん現われていて當時の新羅人も自然について疑懼心をもっていたと思われる[29]。 ところがこのような恐怖感は高麗の俗謠に至るとほとんど消えてしまってそのかわりに自然についての親しさが現われ、その傳統は時調にまで繼がれて來るのである。

例を上げると

19)「青い山も自然のままで、流れる青い水も自然のままだ。山も水も自然のままなら、山水間にうずもれ暮らすわたしも自然のままだ。こんな中で自然のままに育ったこの身ゆえ、老いるのも自然のままにしておこう。」

上の歌は自然の中で融合された卒直な感情を詠んだ代表的な歌であり、歌の中に現われた自然は恐怖の對象ではない。むしろそれは自然の多變多樣な相に隨從順應しつつ、その中に身を任せ、その懷に飛びこむ自然である。

その中に入ると主觀と私心がなくなり、ついには自我もすっかりわすれて自然に沒入してしまう自然である。

一般的に時調に現われた自然觀は二つの傾向をもっている。まず一つは儒學者の士大夫たちの自然觀として、自然中で自然自體の美より道德的教訓をつかもうとしたもので道德が根本になっている自然觀である。もう一つは江湖時歌などに見られるような自然美と自然感情をそのまま詠んだ純粹素朴な自然觀である。[30] ところがこの二つの相反した自然觀に終始一貫して現われているのは自然も人事の一部であるという人間中心文學觀である。それらについて詳しく述べると、時調で自然というのはたいていの場合、自然は人事の一部として意味をもっているもので、自然自體は副次的な

29) 林基中,「新羅歌謠に現われた呪力觀」, (東岳語文論集, 1967) pp. 97-98。
氏は新羅歌謠(鄕歌)は佛教的動機より原始宗教的性格の呪歌であったと說明している。またその代表的な例として歌によって倭侵をしりぞけ慧星歌, 王の不信をうらんで朝鮮の松の木が萎びたという怨歌、その外にも署童謠、兜率歌、處容歌、遇賊歌などにも新羅人の呪術的自然觀がうかがえるといっている。

30) 安秉台,「尹孤山の五友歌に現われた自然觀」(韓國詩歌研究, 太學社, 1983) p. 216。

ものである。即ち、時調の場合は自然をそのまま觀察してそれ自體の美を詠んだものよりも自然を人間の世界に取り入れて觀念化した自然、觀照した自然、つまり哲學の自然を詠んだのである。

その結果前章で述べたようにほとんどの自然素材が倫理的、道德的價値をもっている人格化された存在として認識された。梅、蘭、菊、竹などはそれぞれ節操、清貧、清楚、幽玄の象徵として自然の中で規範を見いだそうとした彼らの嗜好にかなったので四君子として愛好された。

自然詩歌として名高い五友歌でさえ實際に詠まれたのは石、松、竹、月、水などの自然美より不斷、不變、不屈、不欲、不信などの德目であった。

このように時調の歌人たちが自然の中でそれ自體の美より道德的價値と倫理的規範などを發見しようと努力した自然觀の背景には、儒學者たちの文學觀が上げられる。[31]即ち、「文以載道」また「文者載道之器、文者貫道之器」という儒學者の文學觀は儒教が建國理念となった李朝期になって徐敬德、李滉、李珥などの文學者によって主唱されたのである。特に李滉は「陶山雜詠記」[32] で無僞自然という老莊流の自然觀を否定排他し、ひたすら溫柔敦厚という儒學の文學觀を强調して、後世の文學の指標にしたのである。

このように文學を社會教化の一つの手段として認識した、この人間中心という儒學の文學觀は人間中心、現實重視の韓國人の性格にかなう文學觀であり、觀念的自然素材が時調の上に盛ん反映されたのはここに原因があるのである。

こうした人事的文學の盛行が韓國人の性格に由來したという事實は當時文學の享有層であった儒學者たちによってきびしく批判された道教思想が時調にはひんぱんに現われていることからも說明出來るのである。[33]

前述したように時調には武陵桃源を意味するものが多く現われているが、これらのすべては道家思想から由來したもので、そこには自然も人間事の一部だという自然觀を見いだすことが出來るのである。即ち、武陵桃源というのは理想的な神仙の世界であり、不死藥、不老草は神仙たちの仙樂として神仙世界の理想鄕である。

---

31) 金圓卿,「韓國詩歌文學の上においての儒學思想硏究」(韓國文學の思想的硏究上. 1981), pp.170 - 184。
儒學者たちの文學觀は次のような三つの段階を考えることが出來る。1) まず文學は天意を表す道であるという周易の文學觀と、2) 文學は道、德、仁と、詩は禮樂と調和を取るべきだという孔子の文學觀と 3) 詩は以意逆志の志として、政を正して民情を教化させる道具だという〈詩經〉大序 の文學觀がそれであるが、時調の上には 3) の詩經の文學觀が特に大きな影響を及ぼしたのである。

32) 全暎淑,「韓國歌辭文學に現われた自然觀」から(서울大 大學院 1982. p.18) 再引用。
觀古之有樂山林者亦有二焉 有慕玄虛事高尙而樂者, 有悅道義頤心性而樂者. 由前之說 則恐或流於激身亂倫而甚則與鳥獸同羣, 由後之說 則所嗜者糟粕耳 至其不可傳之妙 則愈求愈不得 於樂何有, 雖爲寧爲此而自勉 不爲彼而自誣矣"(李滉, "陶山雜詠記", 增補 退溪全書 1, 第 3 卷 p. 120)

33) 徐俊燮 「朝鮮朝自然詩歌の理念的基盤」(江原大論文集 15 輯 1981)
時調の上の道教思想の盛行について徐元燮氏は中國詩の讀書體驗と、高麗末期に道教が民間信仰として根を下したという二つの理由をもって說明している。

それらにはいつまでも不老長生を願う極く人間的な欲望が内包されている現實中心の生活が反映されている。

この性格は自然時歌の主流を成した「江湖詩歌」でも現われているのである。「江湖詩歌」というのは政界から隱退、また出仕せずに山林の中で自然を友として悠々自適する心境を詠んだもので、時調の中で一番多く現われた主題の自然詩歌である。[34] 江湖詩歌には前述したように白鷗、魚、松、竹、わらびなどの自然素材が多く現われているがこれらは官界から隱退して世俗から超脱した歌人自身を象徴しているのがふつうである。

ところがよく指摘されることであるが、これらの江湖詩歌には現實逃避的な性格ももっているが、それらの目は現實からそむけているのではない。

20)「白鷗よ、驚かないでくれ、おまえを捕まえるためにきたわたしでない。聖上に見放され、行き場がなくてここにやってきた。これからは功名ともおさらばし、おまえについて遊び暮らそう。」

上の歌は官職を退いた作者が田園に歸る心境を詠じたものであるが、上の歌で致仕歸田したのは作者の自意ではなく、聖上(君主)から見放されたというやむを得ない現實のためである。實際黨爭などで、社會の混亂が極に達したという時、江湖詩歌が多く詠じられているし、それらの作者は黨爭の混亂から身を保つために山林に身を託したのであるが彼らの關心はいつも中央政界にあるのである。實際に松江、孤山など多くの歌人が後に政界へ復歸したが、この事實からも江湖詩歌に現實性という人間中心の文學的性格を指摘することが出來るのである。

以上調べたように時調には自然素材の人格化と現實的性格という二つの性格をもっている。即ち、それは自然を劃一的、觀念的に扱った結果、儒學者たちの時調に現われた自然素材の人格化と歸去來風の江湖時調に現われた現實的性格である。こういった性格によって鄭炳昱氏は時調の自然詩歌は自然詩ではなく人生詩である[35] と言ったこともあるが、時調においての自然に對する態度は逃避主義的であり、觀念主義的であり、主情主義的でもあったので現代人の目から見ると自然時調は非藝術の詩であったのである。このような自然の受容態度は自然を概念的、觀念的なものに把握して歌人の情懷に依託する對象物として認識しているだけで、自然の景致を描寫するとか自然物の生態を把握しようとする精誠が不足しているのである。その結果萬葉で見られるような極めてするどい觀察力とは對照的に自然觀察力が不足することで、自然を皮相的に觀察することになり、自然の生態と個性美の發見などに消極的であったという指摘も出てくるのである。[36]

34) 徐元燮,「平時調の主題研究」(語文論叢, 慶北大 1975). pp.160－161。
自然に身を託すという中國魏晋の文學風潮は時調の上にも影響を及ぼした。特に陶淵明の歸去來辭の影響のため、歸去來風の江湖詩歌は韓國の自然詩歌の主流となったのである。徐元燮氏の時調を主題別に大きく分類した調査によると、江湖詩歌類(622)が他の愛情歌(422首) 教訓類(384首)、寄物陳思類(353首)戀主題(238首)よりはるかに多く現われて首位を占めている。

35) 鄭炳昱,「古時調に現われた花」『韓國古典詩歌論』 新丘文化社, 1977.

36) 朴晟義 前掲書 p.729。

特に時調歌人によって漢詩から自然素材が機械的こ導入收容されたことは、花を詠んでも花を知らない、鳥を知らずに鳥を詠むという自然詩歌がふえることになって、その結果自然との交流が不充分であるのみならず自然を歪曲するという否定的性格も生じたのである。

一般的に韓國文學、特に時調において中國漢詩の影響が上げられているのは周知のことである。實際に時調の自然素材には中國のものから典據したものが多く現われているし、また韓國文學特に時調の上には前述したように儒學の文學觀とか老莊の無爲思想、陶淵明の歸去來文學などの影響が深く根を下しているのも事實である。

しかし時調の上にねばりづよく現われている二つの性格、つまり自然素材の人格化と江湖詩歌に現われた現實感には自然も人事の一部として理解しようとした韓國人の人間中心文學の所產であるし、またその根底には韓國人の現實重視、人間中心の樂天的性格と、妥協と綜合を重視する和解思想が基づいているのを見のがしてはいけないのである。

これらについて詳述して見ると、まず建國神話、說話、古代文學などには、韓民族の樂天的で、人間中心の現世重視した性格が多く現われている。[37] そういう性格は文學にも反映されて現われているのである。即ち、佛教思想が盛んになった新羅、高麗歌謠にも無常觀とか來世求福思想より現世的性格が現われているし、また時調に現われた自然素材の人格化などにもその根底には人間中心の現世を重視した性格があるのである。

次に韓國人の自然觀は分析とか觀察より妥協を重視する和解思想が反映されているが。[38] 文學の上には自然と主觀が一體となる自然觀をもつことになる反面、個性美發見には無關心だったという反省も出てくるのである。

また時調の上に汎稱的自然素材が愛用されたこともこの和解思想に據るのである。

2) 萬葉集に現われた自然觀

初期萬葉の歌に多く現われた呪術的宗教的性格の自然素材の背景には、日、月、草、木などすべての自然に神が存在しているという古代人のアニミズムがひそんでいる。即ち、松、竹、榊などの常綠樹に時調の歌人が操とか忠節などの道德的規範性を見いだそうとしたのに、萬葉の場合年中葉の色が變わらない松や榊などの常盤木に滅びを知らない永遠不滅のものを感じた萬葉人が、一貫して歌に詠んだのは自然を神とみなすアニミズムの心であった。

それは前章でも述べたように、萬葉の挿頭とか髮にする黃葉、梅、萩、なでしこ、櫻、柳、藤など

37) 韓國人の現實重視、人間中心の樂天的性格の例は、1) 神界から下降した檀君の建國說話、2) 弘益人間の建國理念 3) 新羅・高麗佛教の護國的性格 4) 朝鮮後期庶民社會に現われた諧謔などでわかるのである。

38) 韓國人の和解思想を立證してくれる例として 1) 佛教，道教など外來思想の中で發見される土着民俗信仰、2) 儒・佛・仙が混在している花郎團の世俗五戒、3) 儒・佛・道教を奬勵した高麗の建國理念、4) 儒・佛・仙に西學を入れて作った東學理念などを上げることが出來る。

も後代には風流的なものにかわっていったが、初期には旺盛な生命力と千年の長生を寿いでいる呪術的性格をもっている。また8)の大津皇子の歌でも鴨には生命の運搬者として呪術的性格が反映されている。このように初期萬葉において植物素材だけではなく動物素材にも呪術的宗教觀を捉えることが出來るのである。この性格は萬葉集だけではなく古事記に出てくる桃(いざなみの黄泉の國)雉(天降神話)や八尋白知鳥(倭健命)などにも反映されていて、日本人の意識の中に根深く下されていたということを示してくれる。また古事記の太陽を天照大神として人格化したり、水の精靈を岡象女とよんでみたりする由來も、古代日本人の自然崇拜の信仰から來ているのであり、これは5～6Cにかけて日本固有信仰である神道として成立したのである。[39]

西田正好氏はこうした自然崇拜の呪術的宗教の成立過程について1)自然靈が特定な自然物を依代にして降臨したという段階2)その依代の觀念が一般の自然物に擴大してあまたの自然物を依代と認める多神教的な自然觀の段階3)そして神靈が依代に常在してその結果自然靈と自然との區別にこだわらず、自然物をそのまま神と見なす典型的な自然觀が普及される段階という三つの段階があると説明している。[40]

こうした自然を神と見なすアニミズムは萬葉人が自然について持っていた一貫した考えであり、農耕時代を通じて脈脈と傳えられ、後代になって「花鳥風月」というような日本人特有の美的自然傳統を培養する基調となったのである。詳述すれば植物や花の姿に目を注ぐのは農耕民族の本性で常に植物の生長と動物の動きなどを見つめながら生活して來た古代日本人は季節の折目を、その時に芽ぶき花咲く植物によって感じて來たのである。

それで狩獵生活を漁撈生活の段階を過ぎて農耕社會を迎えた萬葉初期の歌には、古代人の呪術的宗教的自然觀と農耕生活の姿がともに反映されているのである。

例を上げると

21)「うちなびく春さり來らし 山の際の遠き木末の咲き行く見れば(萬1865)」

上の歌でわかるように、櫻は美しい花として鑑賞される前に季節の神の依物である。即ち、櫻が咲くというのは田の神が訪れるという神意の發現であり、花見というのは山の花の咲き具合を見て秋の稔りを占う行事である。

またこの櫻をかざしにしたりかつらにしたりするのは田の神の行事に奉仕する意味をもっていることであった。[41]

古事記、初期萬葉に集大成された古代人の、自然の移り變りに敏感に反應し觀察する自然觀はしだいに衰えて、終いには呪術的性格から脱皮した景物的な性格の自然觀が現われたのである。一般的には自然を客觀的に觀察し、美的對象としてとらえ始め、詩歌の上に景物的に詠まれた自然素材が

39)樋口清之,「自然と日本人」講談社, 1979, p.14。

40)西田正好,「花鳥風月のこころ」新潮社, 昭54, pp. 48-49。

41)櫻井滿, 前掲書, pp. 144-146。

急に增えて來た天平期を境にして花鳥意識が成立したといっているが、[42]春耕秋收の稻作中心の農耕生活によって春秋對比の四季意識は萬葉初期にもいちはやく芽ばえていたのである。

例を上げると

22)「多ごもり春さり來れば鳴かざりし鳥も來鳴きぬ咲かざりし花も咲けれど山をしみ入りても取らず草深み取りても見ず。秋山の木の葉を見ては黃葉をば取りてぞしのふ青きをば置きてぞ嘆くそこし恨めし秋山そ我は(萬16)」

上の歌は額田王の長歌で春山の萬花の艶と秋山の千葉の彩色との優劣を對比した歌で、萬葉において早くも四季の景物意識が成立したということを立證してくれる。 以後も人麻呂の覊旅歌とか黑人の叙景歌などには自然が呪術的性格から脫皮されて、景物的對象として歌われている。特に赤人の

23)「春の野にすみれ摘みにと來し我そ野をなつかしみ一夜寢にける(萬1424)」

この季節觀をもとにした景物性格の叙景歌の場合は以前の日本人の生活や文學の上に前例をみないもので、それは萬葉人の自然についての關心が、呪術的自然觀または實用性を中心とした生活の場から脫皮、觀賞の對象にした景物の場へと推移したことを意味するのである。こうした景物意識は太宰府の梅花宴歌42首などでもわかるように、中國から渡來文化が流入された天平期を境にして台頭したもので、その背景には漢詩文の影響のもとに開眼された文藝意識と道教的自然觀と佛教的無常觀に基づく萬葉人の新たな自然認識がひそんでいる。[43]

まず漢文學の影響について述べると、萬葉初期、特に近江朝に盛んになった漢文學は詩句の貸借關係と修辭技巧という面だけではなく、柿本人麻呂の七夕歌

24)「天の海に雲の波立ち月の舟星の林に漕ぎ隱る見ゆ(萬1068)」

でも見られるように四季意識を促したのである。そればかりではなく素材の面にまで影響を及ぼして、萬葉集で花鳥が多く詠まれたこともその影響であり、特に梅花の觀賞が盛んになった太宰府の梅花宴歌なども中國六朝の漢詩から刺戟を受けて形成されたものである。[44]

次に、初期萬葉集には佛教、儒教、道教などの外來宗教とか思想が否定されているし、またその性格が多くは現われていないのであるが、後期萬葉の自然觀の形成には道教と佛教の影響を捉えることが出來るのである。

---

42)大久保正,「萬葉集の諸相」
この素材の變化は萬葉の歌集によって異なるのである。比較的に後期に出來た萬葉卷7の雜歌部と羈旅部、卷10の四季分類の雜、相聞の卷は、風雅意識の源流をなす後期的な歌が多く含まれていて、初期に出來た生活素材が多く採り上げられた卷12,13とか民謠的性格の卷14とは異なる。

43)西田正好, 前揭書, p.65.

44)小清水卓二, 前揭書, p.125.

西田正好氏は道教の世界觀は古代人をして自然についてもっていた恐怖感と畏敬感から脱皮させ、自然に對する親和的な自然感情をもたせたといっている。[45] 實際に古事記などに集大成された神話的自然觀がその後しだいに衰退を示すにつれて生じた萬葉に現われた叙景歌の群れの背後には道教、特に老莊思想の自然觀に基づく萬葉歌人たちの新たな自然認識の眼がひそんでいる。

ところがこの老莊思想などの道教は自然を神ではなく友とする親和感を感じさせたが、もう一つ海外から渡來した佛教的な世界觀は、かれらに自然の實相を見極める眼を植えつけさせたのである。即ち佛教の傳來と流布は初めていっさいの呪術的自然觀を排除し、自然の實相を自然神話の目から流轉世界の無常觀へ向けさせた。その結果從來の神話的自然觀は崩壞を迎えたのである。四季文學を基盤として成立した日本人の自然觀は自然を歲月の觀念の上に絶え間なく變移するものとして認識したもので、自然の生滅流轉を凝視した無常觀と同質である[46] ともいえるのである。

以上調べたように、萬葉の前期を支配した古代日本人のアニミズムは藤原京時代を境にして、急激に姿を消して行くとともに、漢文學の影響と道教と佛教という外來宗教の影響のもとに開眼した花鳥意識を基盤とする四季文學が成立、ついには花鳥風月というような日本人特有の美的自然傳統を培養することになったのである。

そのため萬葉後期においての和歌に現われた自然の表現には次のような變化が生じることになる。まず前章で述べたように萬葉の前期には農耕社會を背景にした呪術的、實用的自然素材が多様に現われたが、後期の景物意識の登場とともに自然素材の多様性は整理、制限されて、動・植物の種類も非常に少なくなっていく一方、その素材の內容もそれぞれ季節に合わせた極く慣習的な素材として固定されて行くのである。それに對して志賀重昂氏は日本風景論で近代以前の日本人は日本の風景に對して何らの關心を持たず、前時代からの慣習的定型化された美意識しか持續していなかったと批評したことがあるが[47]、この慣習的定型化された美意識は素材の慣習的固定化から由來した日本民族精神の類型的な特性であると思われる。

次に、このような自然素材の定型化は個人の自然に對する客觀的對象性が後退して、自然自體の美的價値を制限することになるのである。その結果自然に直接體驗より想像的觀照を重んじることになり、歌人は眼前の直接實景による素朴、率直な表現より精妙な描寫を重視する技巧に流れてしまうのである。

一般的に萬葉には豊富な自然素材が現われているが、多くの場合序詞や枕詞の中に漠然と名稱だけが出てくる程度であり、記紀歌謠や西洋詩で見られる素材の特性をはっきりと捉えた客觀的表現のしかたは見えないといわれているが、その理由も想像的觀照を重んじて精妙な描寫を重視した技巧にあるのではないかと思われる。

詳述すれば、日本の和歌では目に見えない感情の現われ方や微妙な心の動き方をそのまま可視的

45) 西田正好, 前揭書, pp. 64-67。

46) 西田正好, 前揭書, p.74。

47) 齊藤正二, 「自然のみかた」(日本を知る事典, 社會思想社, p.830 から 再引用。

現象に擬した表現方法は發達して來たが、西洋詩で見るような自然素材の美的形體、容姿などの美を表した譬喩法はほとんど現われていないのである。[48]

25)「春の苑紅にほふ桃の花 下照る道に出で立つ少女(萬4139)

桃の花の美しさがよく現われている一幅の繪のようなこの歌も、實は自然を描寫したものではなく家持の想像の產物である。

これに對して長谷川如是閑氏は、萬葉以來の日本文學は中國や西洋の文學で見るように自然を現實に鑑賞する態度に欠けている。萬葉で自然詩人として名高い赤人の『吉野山』の歌も『富士山』の歌もほとんどが自然描寫はなくて概念的に記述しているといっている。[49]

このように自然を抒情的に鑑賞するというのは、盆栽、盆景趣味などでも見られるように自然を一つの形式化してそれを局部的にうけ入れる態度とともに、自然を全體的に鑑賞するという點から見ると「樹木を見て森を見ない」というような不完全性を物語ってくれることである。このような自然受容態度は日本民族の集團的產物として自然に對する類型的特色であると思われる。

48) 西田正好, 前揭書, pp. 136-137.

49) 齊藤正二, 前揭書, p.833 から再引用.

V. 結　論

この論文は、時調と萬葉の和歌を對象にした韓日古詩歌の比較研究の一環として、兩國の詩歌に現われた自然觀の比較を目的にしたもので、その結果を要約すれば次のようである。

まず、自然素材の種類とその頻度數などを比較して見ると、全體的な面において時調と和歌の間に大きな差は見られない。しかし動・植物に大別して見ると、時調は動物に向く傾向を、萬葉は植物に向く傾向を見せてくれる。

より具體的に調べて見ると、まず動物素材で兩方とも一番關心の高い素材は鳥であり、その次が獸である。反面昆虫と海物は種類も兩方とも貧弱であり、頻度數も5回以内に散在していて、關心が低い素材であったことが見られる。

植物素材における關心度は兩方ともに、樹木、花類が關心の高い素材で1・2位を占めている。草類は萬葉においては比較的關心の高い素材であるのに、時調ではわらび以外には關心が示されていないのである。その外、果實類、穀類、海藻類は時調・萬葉の兩方ともに關心が低い素材であった。また時調には想像の動物が現われているし、萬葉では時調より魚介類が多く出ているのである。

その外にも、萬葉は生活周邊から取った素材が多く現われているのに反して、時調では中國から借用した素材が多く登場している。また、萬葉は分析的觀察對象として多様な素材が出ているのに反して、時調では綜合的性格の汎稱的素材が多く現われているのにも目がひかれる。

つぎに内容的に見れば、時調では松、竹、梅の歳寒三友など、道德的價値をもっている人格化された自然素材と、桃花、大鵬など道教的色彩をもっている自然素材と、白鷗、魚など歸去來的な性格の素材が多く現われている。また後期になると、實用的素材が庶民階級の辭說時調に現われている。萬葉の自然素材を調べると、初期には呪術的・農耕的性格の素材が多く現われていたが、天平期以後には中國の影響で景物的性格の自然素材が多く現われている。ところが景物意識の台頭によって後期の素材には類型化現象が生じて、和歌の上に固定化性格をもたらすことになるのである。

終りに、それら自然素材の性格を基にして自然觀を類推して見ると、時調に現われた自然は妥協的綜合的な自然として、次のような二つの性格をもっている。一つは儒學者の文學觀の反映が時調に現われた自然素材の人格化と、もう一つは江湖時調に現われている現實的性格である。この性格のため、時調では自然を皮相的に觀察して、その自然の生態と個性美の發見に消極的になったといわれているし、それらは自然詩ではなく、人生詩であるという指摘も出ている。これら自然觀の形成には漢詩とか、儒學者の文學觀、老莊思想、歸去來文學などの中國の影響が擧げられるが、それらには自然も人事の一部だという人間中心の文學觀が一貫している。またその根底には韓國人の現實重視・人間中心の樂天的性格と、妥協と綜合を重視した和解精神が基になっているのである。

萬葉の初期には、すべての自然物には神が存在しているという自然觀が盛んになってそれが神道

思想の基になったのである。この自然觀は農耕時代を經て、天平期になると景物意識が台頭して花鳥風月の四季文學として、發展していったのであるが、その背景には漢文學と道教、佛教の影響があるのである。卽ち、六朝の漢文學は四季意識を促したが、道教の老莊思想は自然との親和を感じさせる一方、佛教の無常觀によって自然の實相を見きわめることになり、從來の呪術的自然觀は崩壞を迎えたのである。

ところが、景物意識が台頭した後期萬葉には自然素材の類型化と美意識の固定化現象が生じて想像的觀照による技巧を重視することになる。その結果自然を抒情的に觀照、または鑑賞するだけで事實性を欠如したという自然鑑賞の不完全性をもたらすことになったのである。

國文抄錄

韓日古詩歌에 나타난 自然觀의 比較研究

— 時調와 萬葉의 自然素材를 中心으로 —

이 論文은 時調와 萬葉의 和歌를 對象으로 한, 韓日古詩歌의 自然觀의 比較를 目的으로 한 것으로, 그 結果를 要約하면 다음과 같다.

먼저, 自然素材의 種類와 그 頻度數등을 比較해 보면, 全體的인 면에서 時調와 萬葉사이에 커다란 有意差는 보이지 않는다. 그러나 動·植物로 大別해보면, 時調는 動物偏重의 傾向을, 萬葉는 植物偏重의 傾向을 보여준다.

보다 具體的으로 살펴보면, 우선 動物素材에 있어서 鳥類는 時調와 萬葉 공히 제일 關心이 높은 素材이며, 獸類는 그 다음이다. 反面, 昆虫과 海物은 種類도 빈약하고 頻度數도 5回以內로 散在해 있는 關心이 낮은 素材이다.

動物素材에 대한 關心度는 時調와 萬葉 모두 樹木과 花類가 關心이 높은 素材로써 頻度數 1·2位를 차지하고 있다.

草類에 대한 關心은 萬葉는 比較的 높은편이나, 時調의 경우는 고사리외에는 관심을 보이지 않고있다. 그밖에, 果實類, 穀物類, 海草類는 時調·萬葉 모두 關心이 적은 素材였다. 특기할만한 점은 時調의 경우엔 想像의 동물이, 萬葉의 경우엔 時調보다 海物類가 많이 나오고 있는 점이다. 그외에도 萬葉에는 生活周邊의 素材가 많이 나오고 있으나, 時調에는 中國에서 借用한 素材가 많이 登場하고 있다.

또 萬葉에는 分析的이며 觀察對象으로서 多樣한 素材가 나오고 있는데, 時調에는 綜合的인 性格의 汎稱的 素材가 많이 나오고 있는 점도 주목을 끌고 있다.

다음, 內容을 살펴보면, 時調에선 松·竹·梅花의 歲寒三友 등 耐寒植物이 道德的 價値를 갖고있는 人格化된 素材로서 많이 나오며, 桃花, 大鵬 등 道德的 色彩를 갖고있는 素材와, 白鷺, 魚등 歸去來的인 性格의 素材도 많이 나오고 있다. 또 後期에는 實用的 素材가 庶民階級의 辭說時調에 登場하고 있다.

한편 萬葉의 自然素材에는, 初期엔 呪術的 農耕的 性格의 素材가 많이 나오고 있으나, 天平期 이후에는 中國의 影響으로 景物的性格의 自然素材가 많이 나타나고 있다. 그런데 景物意識이 擡頭됨에 따라 後期의 素材에는 類型化現象이 일어나서 和歌위에 固定化現像이 나타나게 된다.

끝으로, 이들 自然素材의 性格을 통해 自然觀을 類推해 보면, 時調에 나타난 自然은 妥協的이고 綜合的인 自然으로서 다음과 같은 두가지의 性格을 갖고 있다.

하나는 儒學者의 文學觀이 反映된 時調에 나타나 있는 自然素材의 人格化와 다른하나는 江湖時調 등에 나타나 있는 現實參與的인 性格이다. 이러한 性格때문 時調에는 自然를 皮相的으로 觀察하고 自然의 生態와 個性美의 發見에 소극적이며, 그들 時調는 自然詩가 아니라 人生詩라는 指摘도 나오고 있다. 이러한 自然觀의 形成背景에는 漢寺와 儒學者의 文學觀, 老莊思想, 歸去來文學등 中國의 影響들을 들 수가 있으나,自然도 人事의 一部라는 人間中心 文學觀이 始終一貫 자리잡고 있다. 또 그 根底에는 韓國人의 現實重視·人間中心의 樂天的인 性格과 妥協과 綜合을 重視한 和解精神이 자리잡고 있다.

萬葉의 自然觀을 살펴보면, 初期에는 모든 自然物에는 神이 存在한다는 自然觀이 盛行했으며 그것이 神道思想의 바탕이 되었다. 이 自然觀은 農耕時代를 거쳐 天平期이 되어, 景物意識이 擡頭되고 花鳥風月의 四季文學으로 發展되어 갔는데, 그 背景에는 漢文學과 道敎, 佛敎가 影響을 끼쳤다. 즉, 六朝의 漢文學은 四季意識을 促進시켰으며, 道敎의 老莊思想은 自然과의 親近感을 가져왔으며, 佛敎의 無常觀에 의해 自然의 實相을 直視하게되어, 從來의 呪術的 自然觀은 崩壞하게 되었던 것이다. 그런데 景物意識이 擡頭된 後期萬葉에는 自然素材가 類型化되고 美意識도 固定化되어감에 따라 想像的 觀照에 의한 技巧를 重視하게 된다. 그 結果, 自然을 抒情的으로 感覺할뿐으로, 寫實性이 缺如된 自然鑑賞의 不完全性을 超來하게 되었던 것이다.